親を食ふ蜘蛛

植村利夫

東京市瀧野川區西ケ原町310

世の中の全ての生物は，只種族を保存する爲にのみ生れて來たとは云へないかも知れぬが，其の目的の爲にはあらゆる勞力と犧牲を惜しまない點に於ては殆ど共通的であると思ふ。彼の有名な十七年蟬は，十七年間の長年月を暗黑の地中に過し，漸く華かな地上に姿を現はしたと見るや，僅か數日にして死果てると云ふ。其の十七箇年の苦鬪は，僅か數日の戀愛生活をかち得んが爲であつたとすれば，其の生存の目的は，只種族を保存するといふこと以外にはあり得ないわけである。又蟷螂の雄はこの大なる任務を遂行せんが爲に，己が身命を賭して顧みない事も世人周知の事實である。予も昨秋初めてその肉體の半ばを雌に食ひつくされつゝある蟷螂の雄を目擊した。驚異と云へば驚異である。然し尙注意深く自然界を見渡すと，これにも增した驚異が到る所に展開されてゐるのを知ることが出來るのである。其の一例として，予はこゝに予の觀察したカバキコマチグモの習性の一端に就て書き記しておきたいと思ふ。

日本產の蜘蛛で，初夏の候薄の葉を卷いて住居となし，其の中で產卵育兒をするコマチグモの類は多數知られてゐるが，其の中最も普通に見出されるのはカバキコマチグモといふ種類で，本州・四國・九州及び北海道に分布してゐる體長は10粍以上もあり，全身樺黃色を呈した極めて美麗な蜘蛛の一種である。本種の學名はキラカンチウム・ヤポニクム（*Chiracanthium japonicum*）と云ひ，日本の蜘蛛を調べた有名な獨逸の學者ベーゼンベルヒ及びシュトランド兩氏に依つて，1906年に初めて學界に發表されたもので，其の原記載に用ひられた標本は九州佐賀で採集されたものである。

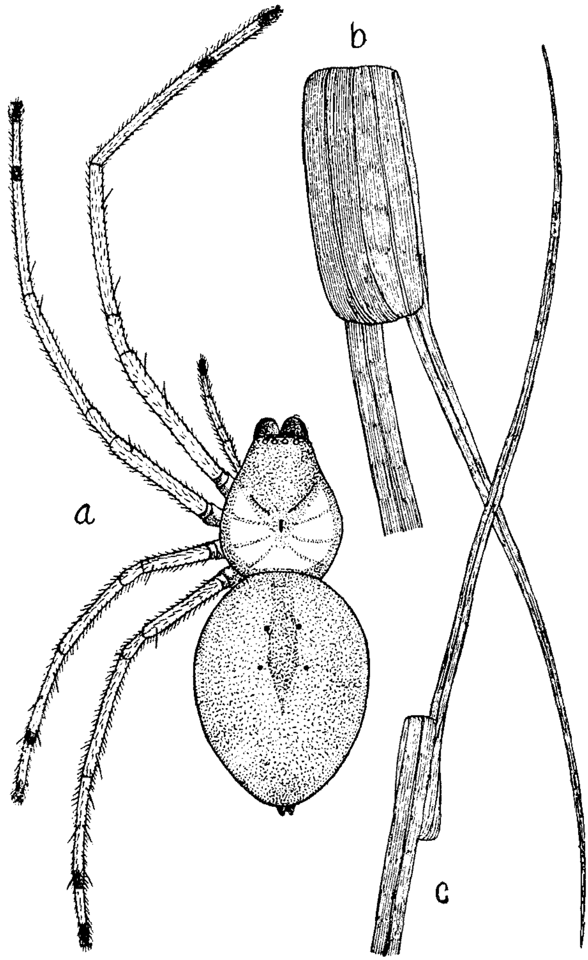
東京市の郊外では五月下旬から九月上旬にかけて，村山貯水池や井之頭公園に於て多數見つかるし，埼玉縣大宮公園にも棲んでゐる。予の知友長江英夫氏の語る所に依れば，同縣蕨地方の子供は多數この卵嚢を集めて，それを兩手で開きながら一種の俚謠を歌つて遊ぶと云ふ。

さてこのカバキコマチグモに限らず，一般に蜘蛛の仔は，卵から孵化して後暫くの間卵嚢内に群居するものであるが，其の期間内に幾許かの生長を遂げる仔蛛のあることは觀察者の等しく之を認むる所であるが，果して仔蛛は其の間何を食料として生長するものであるかに就ては，未だ一定の學說もなく，又特筆すべき觀察もなされてゐない。ウイルダー氏はこれを友喰ひに依るものであるとなしたが，多くの學者は之を否定してゐる。事實蜘蛛の世界では兄弟姉妹の間に於てさへ友喰ひの行はれる事は殆ど常道と見て差支へなく，從つて予も又卵嚢内の仔蛛は友喰によつて生長する場合のある事は認めるし，事實そうした場面にも屢々直面してゐるのであるが，これは寧ろ例外的の場合であつて，全ての場合に適用することは出來ない。尙多くの場合卵嚢内に仔蛛の蛻が多數見つかるものであるが，これを以て直ちに友喰の結果生じたものであると早合點してはならない。多くの仔蛛は卵嚢内に於て第一回の脫皮をなすからである

而してこゝに不思議な事實が一つ存在した。それは前記コマチグモの種類に於て，卵嚢から仔蛛が出る頃に，其の卵嚢を試みに引割いてみると，必ず其の中に親蛛の蛻が殘つてゐる事である。而して多くの觀察者は之を以て前記仔蛛の場合と同樣，これも親蛛の蛻なりと稱してゐたやうである。而して予は其の說に對して大いなる疑問を抱いた。

何となれば，卵嚢を作つて產卵する所の蜘蛛は必ず成熟した親蛛に決つてゐる。而して一旦成熟して產卵までした親蛛が再び脫皮する事はあり得ないからである。果して然らば，卵嚢内の蛻は產卵前に脫皮して生じたものであるかといふに，さうでもない事は次の事實に依つて明らかである。卽ちこの蛻が住居内に殘されてゐるのは，仔蛛が已に住居外に離散したもの，或は今正に離散せ

Plate 3 **カバキコマチグモと其の住居**



a. カバキコマチグモの成雌（即ち仔に食はれる母蛛である） b. 雌の住居（この中で産卵し仔に食はれて死ぬ）
c. 雄の住居（幼雌の住居もこれと同様な場合がある）

植村原圖

んとする直前のものに限るのであつて，共の他の場合には，必ず住居内には，仔蛛の孵化したものとしないものとを問はず，それを見守つてゐる肥滿した母蛛が入つて居り，共の場合は決して蛻の破片さへも認められないからである。試みに今産卵後間もない一の住居の構造を調べてみるに，卵形をした內部は上下の二室に分れ，上方の一室は產室で，共の中に多數の卵は丸く產み重ねられ下方の一室は產卵後母蛛の退いて休養し，仔蛛の孵化を待つ控室であることがわかる。勿論この場合には親蛛の蛻らしいものは破片すら認め得ない。こゝに於てこの蛻說は根底的に誤つてゐる事は明らかである。果して然らばこの蛻は如何にして生じたものであらうか。

この問題を提げて，予は數年來毎夏東京府下井之頭公園に屢々足を運んで其の解決に努めた。予は幾多の卵囊を予の研究の犧牲に供した。而して遂にこの疑問の解決の日が到來したのである。時は正に昭和十四年七月二十四日，予は予の兩手に依つて引割かれた一個の住居內に於て，恐るべき慘虐なる光景を目擊したのである。見よ百數十頭の仔蛛は親蛛の頭から脚の先まで鈴なりにたかりつき，今や無慘にもその親蛛の血肉をすゝり盡さんとしてゐたのである。予は共の瞬間骨髓にまで徹して形容し難い一種のスリルを感じた。食はれつゝある蜘蛛，それは紛ふ方なくこの仔蛛を產み育てた血肉の母である。その母蛛が今愛する仔蛛のために共の肉體の大半を食ひ盡されつゝあるのである。何たる驚くべき犧牲ではないか。これが人間社會の道德に引用出來るだらうか。果して倫理學の大家が，この極端な自己否定を何と解釋するであらう。これが果して神がこの蜘蛛に與へた宿命であらうか。予は心をとり戾してこの嚴肅なる事實の前に驚嘆の眼を瞠つた。

予は更に多數の卵囊を採集してそのまゝ自宅に持ち歸り，觀察を續けたが，何れの場合も同樣であることを確める事が出來た。

予は更にこゝに予の報告を證明する一の有力なる觀察談を附記する事が出來ることを幸に思ふ。予の友人片岡佐太郎君は，同日予と採集を共にした一人で

あるが，氏も又この卵嚢數個を持ち歸り，一個を更に他の友人に贈り，二人は申合せてその卵嚢を半ば引割き，内なる親蛛の存在を外部から認め得るやうにして，毎日これをポケツトに入れて肌身離さず觀察を續けた所，やがて卵嚢から孵化した仔蛛は母蛛の全身になりたかり，數日の間に次第に親を食ひ盡す有樣を仔細に觀察，其の結果が兩氏共同じであることを予に話され，更に片岡佐太郎氏は其の一部を雜誌理科教育誌上に簡單に發表されてゐる。而してその片岡氏の報ずる所に依れば，仔蛛に食はれる親蛛は決して逃亡する意志なく（同氏の觀察の場合は卵嚢は已に引割かれてゐるのであるから，逃亡の自由は與へられてゐるのであるが）甘んじて肉體を愛兒に提供するかの如く見えたとの事である。事こゝに至つては更に敬仰の情をさへ覺えるではないか。

試みに予は一卵嚢内から孵化した仔蛛の數を算へてみたが，180頭の多數に上つた。さしも見事に肥つた親蛛の肉體も僅か數日の間に食ひ盡されてしまふのも宜なるかなである。

こゝに予の觀察した只一回の例として興味の深い事は，まだ成熟しない雌蛛が，しきりに產室の製作に餘念ない時に，已に他の一室に成熟した雄が來て平然と控へてゐた一事である。これを以てみれば，或はこの住居内に於て雌雄の交際が行はれるのではないかとも思はれるが，この時の雌はまだ成熟してゐなかつたから，或は偶然の一場面に過ぎなかつたのであつて，これを以て兩者の仲を邪推する事は，甚だ以て迷惑至極であるかとも思はれるから，この解決は又の日までお預けとすることにしてをく。而してこの一例に依つて，雌はまだ雄と交らず從つて勿論妊娠もしてゐない云はゞ娘の時代に於て，已に產室の製作にとりかゝり，やがて母となる日の準備を整へておく事が判明したわけで，これ又他に類を見ない所として大いに感服すべき點である。それに反して，この娘蛛の甲斐甲斐しい姿を，隣室に忍びこんで盜み見してゐる雄の姿こそ，亦或意味に於て哄笑を禁じ得ないものがあつた」

綠の風吹き渡る薄の原に，葉を折り曲げて住居となし，風にゆられながら愛

を私語くカバキコマチグモの生活を想像すれば，聊か情熱の詩人らしい感激をさへ呼び起されるのであるが，一度母となつた雌蛛が，同じ葉末の住居の中で世にも稀な犠牲となつて消え果てる凄絶な最後の姿に思ひを致す時，豈冷汗三斗の感を覺えざるものあらんやである。而して又これが母性愛の極致と云はうか，嚴肅なる宿命の規範と云はうか，吾人は只自然界に實在する極端なる驚異的事實の前に，只々敬虔なる合掌の念を禁じ得ないものである。

親蛛を食つて生長した仔蛛は，やがてなつかしの住居を後に，葉末を渡る緑の風に乘つて思ひ思ひの旅に出るのである。生きておれば，この輝かしい愛兒の門出を喜んで見送るであらう所の母蛛を，自ら食ひつくしてしまつた仔蛛達は，故郷を去るに何の未練もなく，くつきりと晴れ渡つた緑の大空に，スイスイと舞ひのぼつて行くのである。(皇紀二千六百年紀元節の日に稿す)

イソハヘトリグモの分布に關する追加報告

細　野　善　熈

神奈川縣逗子の海水浴場は玆十三四年私の續けて行く處であるが，こゝにイソハヘトリの棲む事は氣が付かなかつた。逗子の海の家に着物を脫いでおいて私は何時も葉山寄りの岩場まで步いて行き，其處で小魚など追廻して餘念がなかつた。そのために蜘蛛までは注意が屆かなかつたものと思ふ。

あそこの岩場は七八年以前ダイナマイトで爆破して船舶のもやひ場になつて終つた。爲に雄大な岩場といふものは無くなつてしまつたが，疊二三枚位のものは葉山迄のあひだ無數にある，波の滿ち引きをくゞつて蟹が敏捷に遊びたはむれてゐるやうなその岩に，去年の七月廿八日，澤山のハヘトリグモ科一種が走り廻つてゐるのには驚いた。マツチ箱，空の卷具なぞを管瓶代りにして♀♂各3頭を捕へたが，岩の間隙へすぐ逃避するので容易には捕まらぬ。そしてそ